山の辺の道

額田王歌碑

歴史街道

NaraKiKiManyo Project Since 2012
なら記紀・万葉

中山町付近

- 自然を大切にしましょう
- 「ゴミ持ち帰り運動」にご協力下さい

古代ロマンの世界へ

山の辺の道は、三輪から奈良へと通じる上古の道。大和平野には南北に走る上・中・下ッ道の官道があり、それぞれ7世紀の初め頃に造られた。上ッ道のさらに東にあって、三輪山から北へ連なる山裾を縫うように伸びる起伏の多い道が山の辺の道である。現在、その道をはっきりと跡づけることはできないが、歌垣で有名な海柘榴市から三輪、景行、崇神陵を経て、石上から北上する道と考えられている。その大部分は、東海自然歩道に指定されている。中でも古代の面影をよく残し、万葉びとの息づかいを伝えるのが桜井市金屋から天理市石上神宮までの、約12キロ。古社寺、古墳、万葉歌碑、多彩な伝承の舞台などが展開し、知らぬ間に歩く者を古代の幻想の世界へと誘ってくれる。

山の辺の道歌碑

1

未通女等が　袖布留山の瑞垣の
久しき時ゆ　恋ひき善は

出典／「万葉集」巻4～501
作者／柿本人麻呂

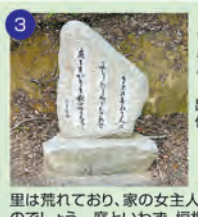
石上布留の社の瑞垣が長い間あるように、私はあなたを久しい間思っていた。

2

石上 布留の神杉 神びにし
我やさらさら 恋にあひにける

出典／「万葉集」巻10～1927
作者／未詳

石上の布留の社の年ふりて神々しい神杉のように年老いた私が、今さら思いもかけず恋にとりつかれてしまったよ。

3 

さとはあれて
人はふりにし やどなれや
庭もまがきも 秋のののらなる

出典／「古今和歌集」巻第4、秋歌上
作者／僧正遍昭

里は荒れており、家の女主人(遍昭の母)も年老いてしまった住まいだからなのでしょう。庭といわず、垣根といわず、一面に秋の野良です。

4

うち山や
とざましらずの 花ざかり

出典／「大和巡礼」
作者／松尾芭蕉（宗房の頃）

今、内山永久寺に参拝してみると、見事なまでに満開の桜でうめつくされている。土地の人々はこの桜の花盛りをよく知っているのであろうが、外様（よその土地の人々）は知るよしもない。

5

月待て
嶺こへけりと聞くままに
あはれよふかき　はつかりの声

出典／「布留法楽三十首」中　月前雁
作者／十市遠忠

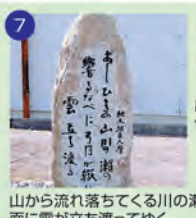
月の出を待ってあの嶺をこえてきたんだなぁ。ああ、この夜更けに初雁の声がしているよ。

6

山の辺の道ははるけく
野路の上に 乙木の鳥居
朱に立つ見ゆ

作者／東歙

山の辺の道をはるばる歩いてきた。
行く路の先には乙木の鳥居が、ひときわ赤く立っている。

7 

あしひきの 山川の瀬の
響るなべに 弓月が嶽に
雲立ち渡る

出典／「万葉集」巻7～1088
作者／柿本人麻呂

山から流れ落ちてくる川の瀬の音が高くなりひびくにつれて、弓月嶽には一面に雲が立ち渡ってゆく。

8

衾道を 引手の山に
妹を置きて 山路を行けば
生けりともなし

出典／「万葉集」巻2～212
作者／柿本人麻呂

引手の山に妻の屍を葬っておいて、山路を帰ってくると悲しくて生きた心地もしない。

9

えにしあれや　長谷寺の法の水
むすぶ庵も　ほど近き身は

出典／「百五十番自歌合」
作者／十市遠忠

長岳寺の仏縁にも結ばれ、庵をむすぶにも近くに導いていただいたことである。

10

天下おさまる時を朝夕の
月にも日にも先いのる哉

出典／「百番自歌合」
作者／十市遠忠

思いを述べる。数々の合戦に出陣してきた遠忠にとって、平和は心からの願いであった。朝夕の月にも日にもまず祈るかなと、その心境を吐露した歌である。

11

玉かぎる 夕さり来れば
巻人の 弓月が嶽に
霞たなびく

出典／「万葉集」巻10～1816
作者／未詳

夕方になってくると、弓月嶽に霞がたなびいているよ。

12

二古陵に
一人の衛士や ほととぎす

作者／武田 無遅子

崇神、景行の古からある二つの陵を一人の守衛が守っている。
ほととぎすも鳴く、そんな静かなところであることよ。

13

うま酒三輪の山青丹よし奈良の山の山のまに
い隠るまで道のくまいさかるまでに
つばらにも見つつ行かむをしばしばも
見さけむ山を心なく雲の隠さふべしや

出　典／「万葉集」巻1～17
作　者／額田王
揮毫者／中河與一

なつかしい三輪山よ。この山が奈良の山々の間に隠れてしまうまで、また行く道の曲がり角が幾つも幾つも後ろに積もり重なるまで、充分に眺めていきたい山であるものを、たびたび振り返っても見たい山であるものを、無情にもあんなに雲が隠してしまってよいものだろうか。

（反歌）
三輪山をしかもかくすか雲だにも
心あらなむかくさふべしや

出　典／「万葉集」巻1～18
作　者／額田王
揮毫者／中河與一

名残惜しい三輪山をどうして雲があんなに隠すのか。人はともかく、せめて雲だけでもやさしい情があってほしい。あんなに隠すべきであろうか。

14

巻向の檜原も未だ雲いねば
小松が末ゆ淡雪流る

出　典／「万葉集」巻10～2314
作　者／柿本人麿
揮毫者／山本健吉

巻向の桧の原にもまだ雲がかかっていないのに松の枝先を沫（泡）雪が流れるように降っている。

15

あまくもにちかくひかりてなるかみの
みればかしこみねばかなしも

出　典／「万葉集」巻7～1369
作　者／作者未詳
揮毫者／会津八一

天雲の近くで光って鳴る雷のように、あの方にお逢いすれば恐れ多くて近寄れず、お逢いしなければ悲しいのです。

16

ぬばたまの夜さり来れば巻向の
川音高しもあらしかも疾き

出　典／「万葉集」巻7～1101
作　者／柿本人麿
揮毫者／武者小路実篤

夜になってきたら近くの巻向川の川音が、とりわけ高くなってきた。山嵐が激しくなっているのだろうか。

17

三諸のその山なみに子らが手を
巻向山はつぎのよろしも

出　典／「万葉集」巻7～1093
作　者／柿本人麿
揮毫者／佐藤佐太郎

三輪山の山並びに巻向山があるが、その並びかたがまことによろしい。

18

あしひきの山かも高き巻向の
岸の小松にみ雪降りけり

出　典／「万葉集」巻10～2313
作　者／柿本人麿
揮毫者／岡　潔

おや、巻向川の川岸の小松に雪が降ってくる。このあたりは巻向山の山裾で、平地に比べて高いせいなのだろう。
（※巻向山の崖の小松に雪が降ってくると解する説もある。）

19

あしひきの山川の瀬のなるなべに
弓月が嶽に雲立ち渡る

出　典／「万葉集」巻7～1088
作　者／柿本人麿
揮毫者／鹿児島寿蔵

山から流れ落ちてくる川の瀬の音が高くなりひびくにつれて、弓月嶽には一面に雲が立ち渡ってゆく。

20

痛足河、河波立ちぬ巻目の
由槻が嶽に雲居立てるらし

出　典／「万葉集」巻7～1087
作　者／柿本人麿
揮毫者／棟方志功

穴師川に川波が立っている。巻向山の由槻嶽に雲がわきあがっているらしい。

21

巻向の山辺とよみて行く水の
みなあわの如し世の人われは

出　典／「万葉集」巻7～1269
作　者／柿本人麿
揮毫者／市原豊太

巻向の山辺をどうどうと音を立てて流れ行く川の水泡のようなものだ。この世の人であるわれらは。

22

神山の山邊真麻木綿みじか木綿
かくのみ故に長くと思ひき

出　典／「万葉集」巻2～157
作　者／高市皇子
揮毫者／入江泰吉

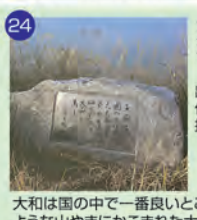
三輪山の山あたりにある真麻の木綿は短いものだ。そのように十市皇女の命も短いものであったのに、何としたことか、私はいつまでも長くつづく命だとばかり思っていた。

23

鳴神の音のみ聞きし巻向の
桧原の山を今日見つるかも

出　典／「万葉集」巻7～1092
作　者／柿本人麿
揮毫者／千　玄室（15代 千 宗室）

雷のような大変な評判にだけ聞いていた、この巻向の檜原の山を、やっとのおもいで今日は見たことよ。

24 

大和は国のまほろばたたなづく
青垣山ごもれる大和し美し

出　典／「古事記」
作　者／倭健命
揮毫者／川端康成

大和は国の中で一番良いところである。幾重にもかさなりあった青い垣根のような山やまにかこまれた大和はほんとうにうるわしいところであります。

25

かぐ山は畝火ををしと耳成と相あらそひき
神代よりかくなるらしいにしへも
しかなれこそうつせみもつまをあらそふらしき

出　典／「万葉集」巻1～13
作　者／天智天皇
揮毫者／東山魁夷

大和三山の香具山、畝傍山、耳成山の間には、古い伝承に見られるような男女の間のいりこみがあって、一人の女性を二人の男性が嬬争いをしたという。こうしたことは、神代の頃にもあったらしい。

26

三諸は人の守る山本辺はあしび花咲き
末辺は椿花咲くうらぐはし山ぞ泣く児守る山

出　典／「万葉集」巻13～3222
作　者／作者未詳
揮毫者／久松潜一

三諸山（三輪山）は人がみだりに立ち入ることなく、大切に一木一草を守ってきている山である。この山の麓のほうには、馬酔木の花が咲き、山頂のほうには、椿の花が咲くのである。この山は、ほんとうに心の底から美しく感じられる山、泣く子の気持ちを静めるように、あれこれと気をつかって、守り大切にしている山であるよ。

27

いにしへにありけむ人もわが如か
三輪の檜原にかざし折りけむ

出　典／「万葉集」巻7～1118
作　者／柿本人麿
揮毫者／吉田富三

昔の人も、私が今するように、この三輪の桧原で髪挿を折ったことだろうか。

28

古の人の植えけむ杉が枝に
霞たなびく春は来ぬらし

出　典／「万葉集」巻10～1814
作　者／柿本人麿
揮毫者／徳川宗敬

昔の人が植えたという杉の枝に霞がたなびいていることだ。春はやって来たに違いない。

29

山吹きの立ちしげみたる山清水
酌みに行かめど道の知らなく

出　典／「万葉集」巻2～158
作　者／高市皇子
揮毫者／安田靫彦

十市皇女の葬ってある墓地のあたりには、黄色い山吹に取り囲まれた山の清水がある。それを汲むために、皇女の御霊は通っておられるだろう。行って逢いたいなと思うが、その道を知らないのでどうすることもできない。

30

あし原のしけしき小屋にすがだゝみ
いやさや敷きてわが二人寝し

出　典／「古事記」
作　者／神武天皇
揮毫者／北岡壽逸

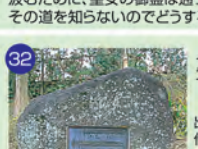
葦のいっぱい生えた原の粗末な小屋で、管で編んだ敷物をすがすがしく幾枚も敷いて、私たち二人は寝たことだったね。

31

狭井河よ雲立ちわたり畝火山
木の葉騒ぎぬ風吹かむとす

出　典／「古事記」
作　者／伊須気余理比売
揮毫者／月山貞一

狭井川の方からずっと雨雲が立ち渡り、畝傍山では木の葉がざわめいている。今に大風が吹こうとしている。

32 

やまとはくにのまほろばたたなづく
青がき山ごもれる大和しうるわし

出　典／「古事記」
作　者／倭建命
揮毫者／黛　敏郎

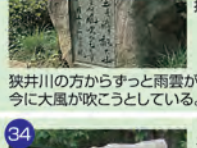
大和は国の中で一番良いところである。幾重にもかさなりあった青い垣根のような山やまにかこまれた大和はほんとうにうるわしいところであります。

33

うま酒三輪の祝（社）の山照らす
秋の黄葉散らまく惜しも

出　典／「万葉集」巻8～1517
作　者／長屋王
揮毫者／堂本印象

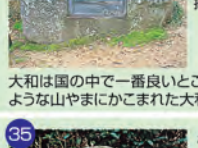
三輪神社のある山を、照らすばかりに色づいた秋のもみじの散ることの惜しまれることよ。

34 

此の神酒は 我が神酒ならず 倭なす
大物主の 醸みし神酒 幾久 幾久

出　典／「日本書紀」
作　者／活日
揮毫者／和田嘉寿男

この神酒は私が作ったものではありません。倭の国を造られた大物主神が醸された神酒です。幾世までも久しく栄えよ。幾世までも久しく栄えよ。

35 

わが衣色に染めなむうまさけ
三室の山はもみぢしにけり

出　典／「万葉集」巻7～1094
作　者／柿本人麿
揮毫者／林　房雄

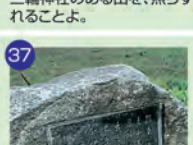
三輪山の木々が美しく紅（黄）葉してきた。私の衣を、その美しい色で染めよう。

36

磯城島の日本の国に人二人
ありとし思はば何か嘆かむ

出　典／「万葉集」巻13～3249
作　者／作者未詳
揮毫者／山口誓子

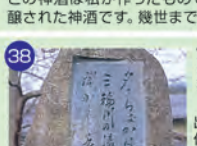
この大和の国に、私のいとしいと思う人が、もし二人もいると思うのだったら、何をあれこれと嘆くことがありましょう。私の恋しい人はたった一人しかいないものだから、あれやこれやと、気を遣うことばかり多いのです。

37 

こもりくの泊瀬の山青幡の忍坂の山は
走出のよろしき山の出立の
くわしき山ぞあたらしき山の荒れまく惜しも

出　典／「万葉集」巻13～3331
作　者／作者未詳
揮毫者／有島生馬

泊瀬の山、忍坂の山は、家から一走り出たところ、家の戸口を出たところにある（見える）美しくすぐれた山である。このりっぱな山をいつまでも保ちたいのだが、年ごとに荒れていくのは、ほんとうに惜しいことである。

38 

夕さらば河蝦鳴くなる三輪川の
清き瀬の音を聞かくし良しも

出　典／「万葉集」巻10～2222
作　者／作者未詳
揮毫者／樋口清之

夕方になると、いつもカジカの鳴く声のする三輪川の清いたぎつ瀬の音を聞くのは、何ともいえずいい気持ちだ。

39

葉は灰（灰）さすものぞつば市の
八十のちまたに逢へる児や誰

出　典／「万葉集」巻12～3101
作　者／作者未詳
揮毫者／今　東光

つば市の辻で逢った貴女は、何というお名前ですか。

おでかけネット（JR）　近鉄ホームページ　奈良バスなびweb　桜井市観光協会　天理市観光協会

発行者　山の辺の道美化促進協議会
構成団体　奈良県・天理市・桜井市・天理市観光協会・
一般社団法人桜井市観光協会・近鉄・JR西日本・奈良交通・
天理ライオンズクラブ・桜井ライオンズクラブ

お問い合せ：天理市産業振興館
Tel.0743-63-1242
桜井市観光まちづくり課
Tel.0744-42-9111㈹

2024.12.41.000

山の辺の道 ハイキングコース

石上神宮

歴代の天皇の崇敬が厚く、神庫には多くの武器が収められ、武器についての伝承が多い神社で、神功皇后の摂政52年に百済の使者が献じたという七枝刀（七支刀（国宝））も伝えられている。祭神は布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）といわれる神剣。奈良朝以前から神宮の号を使ったのは伊勢神宮とここだけである。

内山永久寺跡

永久2年（1114）に鳥羽天皇の勅願により興福寺大乗院頼実が創建。盛時は52坊を誇ったが、神仏分離の影響を受け廃寺となった。南北朝時代、後醍醐天皇が吉野遷幸のとき立ち寄ったとされる萱の御所跡と本堂池だけが残る。

竹之内・萱生環濠集落

奈良盆地には環濠集落が多いが、竹之内は標高約100mで、県内ではもっとも高地にあるとされる。南北朝時代から筒井順慶による統一まで、大和の戦国乱世が生んだ自衛の集落で、周囲に用水池を兼ねる濠を、内部に竹やぶを植えこんだ。竹之内のほか、萱生にも同様の集落が残る。

夜都伎神社

春日大社の4神を祀り、拝殿の萱葺き屋根が珍しい。バス停への道に建つ鳥居は嘉永元年に春日若宮から移したものである。

大和神社

山の辺の道より西に位置し、鬱蒼とした森が広がり350mもの参道を抜けると、大和神社がある。4月1日には、大和にいち早く春を告げる「ちゃんちゃん祭」が行われる。また、9月23日には、市無形民俗文化財に指定されている、雨乞満願の「紅幣（べにしで）踊り」が奉納される。

黒塚古墳

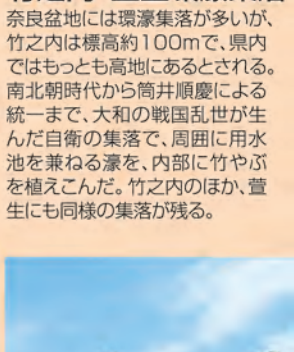
柳本古墳群の一つで、全長約130mの前方後円墳。平成10年（1998）に、卑弥呼の鏡ともいわれる33面もの三角縁神獣鏡が出土した。隣接する黒塚古墳展示館内には、竪穴式石室が原寸大で復元されており、鏡や鉄製品のレプリカ等が展示されている。

崇神天皇陵

山辺道勾岡上陵ともいい、景行陵と同じく丘陵の先端を利用した全長約242mの前方後円墳で、周囲に濠がめぐらせてある。天皇陵としてはもっとも古いものといわれる。

景行天皇陵

山辺道上陵ともいい、丘陵の先端を利用して3段に構築された前方後円墳。全長約300m、周囲約1キロに濠をめぐらせた堂々たる古墳である。



相撲神社

穴師坐兵主神社参道脇にあり、相撲発祥の地と伝えられている。旧蹟カタヤケシがあり、野見宿禰が祀られている。

桧原神社

大神神社の摂社のひとつで、三輪山中にある磐座を神体としているので本殿はない。天照大御神を祀り、元伊勢とも呼ばれている。井寺池周辺には川端康成、東山魁夷などの万葉歌碑が立ち、空間の中にとけこむような風情を見せている。

箸墓古墳

大きな前方後円墳。全長280m、後円部の直径は157m、高さ23m。前方部の幅は25m、高さ13m。孝霊天皇の皇女で崇神天皇の叔母であった倭迹迹日百襲姫（やまとととひももそひめ）命の墓である。周囲には周濠の一部がいまも残っている。

三輪山

48峰といわれる峰々から成り、笠を伏せたような山容が美しい。古代からもっとも聖なる山とされている。三輪山は、春日山系では珍しく斑糲岩（はんれいがん）で形成され、山中には巨大な岩が数多く露出している。これらの岩石群は、山頂付近の奥津磐座（おきついわくら）、中腹の中津磐座、山麓の辺津磐座というように呼ばれ、それぞれの磐座には大物主神、大己貴神、少彦名神が鎮まるといわれている。

大神神社

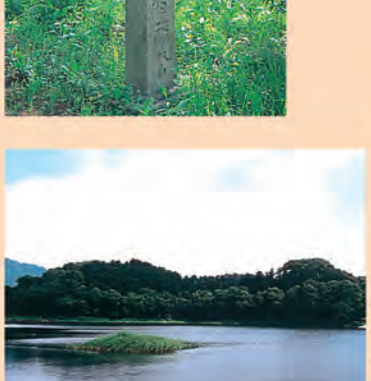
三輪明神ともいい、背後の三輪山を御神体とするわが国最古の神社。御諸山または神体山ともいわれ、古くから聖なる山、神の山として崇められており、三輪山神話として記紀にも登場することが多い。

玄賓庵

玄賓僧都の庵。もとは三輪山の桧原谷にあって、山岳仏教の寺として栄えたが荒廃し、寛文7年（1667）に比丘宴光が中興した。明治維新の神仏分離で現在地に移っている。

金屋の石仏

金屋の村はずれにある収蔵庫に蔵められている2体の石仏。いずれも高さ2.14m、幅83.5cm、厚さ21.2cmの2枚の泥板岩に釈迦如来像（右）、弥勒如来像が浮彫りにされている。平安時代でも後期の造立と考えられる。



三輪山平等寺

明治の神仏分離で完全に廃絶した。明治13年（1880）に翠松寺として旧平等寺の山門付近に再建され、昭和52年にもとの「平等寺」に復している。本堂、不動堂のほか、江戸時代の仏足石などがある。

仏教伝来之地碑

欽明天皇の時代に百済の聖明王の使節が訪れ、釈迦仏の金剛像一躯と経論若干巻等を献上し、日本に仏教を最初に伝えたといわれている所。また、海柘榴市観音堂を含むこの一帯を日本最古の市があった海柘榴市跡と呼び、山の辺の道の南の起点、到着点。